

来朝西洋人の見た幕末・明治期の日本都市風景*

江戸/東京・大坂/大阪・京都を対象として

Japanese Townscape Which Occidentals Saw in 1858-1893

Taking Tokyo, Osaka and Kyoto as an Object of Study

篠塚伸一** 宮元大輔*** 福井恒明**** 篠原 修*****

By Shinichi SHINOZUKA, Daisuke MIYAMOTO, Tsuneaki FUKUI, Osamu SHINOHARA

概要

本研究では、幕末・明治期に江戸/東京、大坂/大阪、京都を訪れた27人の西洋人の著書の風景記述を分析することで、近代化以前の日本の都市景観の特徴を探ることを目的としている。その結果、次のことを明らかにした。①外国人に風景、町全体やゾーニングという大きなスケールで認識されている②中遠景においては自然景観が「図」、居住景観が「地」となり、近景では人々の活動などが「図」、建築物が「地」となっている③都市に多様な娯楽が存在し、特に水辺において顕著で、娯楽活動が都市風景の魅力となっていた。

1. 背景と目的

明治維新以降日本は欧米に対する鄙意識から、都市モデルを欧米に求め、欧米の建築技術や都市計画的手法などを用いて、現在の都市を建設してきた。

しかし、それらの技術・手法は表面的なもので、その根本である設計思想・規範が受容されたとは言いがたい。現在の日本の都市景観が非常に混乱している根本的な原因はそこにあると思われる。

今後の都市景観形成を考える際には、よりどころとなる設計思想・規範が求められていると言えるが、都市景観の設計思想・規範を構築するためには、まず、日本の都市が持つ景観の素質・特徴を知る必要がある。しかし、日本人自身には日本の都市景観の特徴は気付きにくい。

一方、日本を訪れた外国人が残した著作を読むと、彼らが自らの視点に基づいて、日本の風景を観察していたことが分かる。これらの記述には、日本の都市景観の特徴が現れていると考えられる。

そこで、本研究の目的は、日本に訪れた外国人の記述を分析することにより、西欧と比較した日本の都市景観の特徴を探ることとする。

2. 既往研究

(1) 北川大次郎、江戸・東京の都市景観形成原理に関する考察¹⁾

幕末・明治期に江戸/東京を訪れた西洋人の記述を分析し、幕末・明治初期の江戸の景観形成原理を分析している。この研究は「動」「点」「選択」という3つのキーワードによって、江戸・東京の景観形成原理を説明し、江戸は、複合的な都市空間の利用や都市施設の点的配置によって、町の乱雑さを拡大させる傾向を持ちつつも、高度な選択性によって秩序を保っていたとしている。

この研究は江戸の景観形成原理について本質的な指摘をしているが具体的な景観分析とそれに基づく日本の都市の姿に関する考察は手薄である。

II) 青木陽二、1900年までに日本に訪れた西洋人の風景評価に関する記述²⁾

この報告書は、1900年までに来日した西洋人の風景記述をまとめたものである。この報告書の特長は、1549年から1900年までに来日した西洋人の和訳著書から風景記述を網羅的に収集していることである。また、場所も、全国各地の都市、農村、自然風景記述を幅広く収集している。

しかし、各著書からは一部分の特徴的、印象的な風景記述が抜粋されているにとどまり、都市や地域ごとの分析は行われていない。

3. 対象

(1) 年代

近代化以前の日本の都市景観が持っていた特徴を分析すること、また、文献の量が多いことから、年代は江戸末期から明治中期までの文献を対象とする。

*keyword: 景観、幕末、明治、西洋人の風景記述

**非会員 工修 居食処明恵 (113-0033 東京都文京区本郷 6-14-3)

***学生会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻修士課程

****正会員 工博 東京大学大学院専任講師

*****フェロー会員 工博 東京大学大学院教授 工学系研究科社会基盤学専攻 (113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)

(2) 都市

対象都市は江戸/東京、大阪/大阪と京都とする。この三都市は日本の代表的な大都市であり、また歴史の蓄積のある都市である。そのため、多数の外国人が訪れており記述の内容も豊富であることがその理由である。

4. 方法

研究の方法は以下の通りである。

- ① 幕末・明治期に来日した外国人の和訳著作を収集
- ② 江戸/東京、大阪/大阪、京都の風景記述を抜粋
- ③ 江戸/東京、大阪/大阪、京都の風景記述を以下のよう
に分類
町全体の印象、雰囲気・眺望・水辺・町人地・寺社
地・武家地・建築物・郊外
- ④ 江戸/東京、大阪/大阪、京都の風景記述を分類ごと
に要約し、特徴を抽出
- ⑤ 江戸/東京、大阪/大阪、京都の風景の特質を考察

5. 分析対象著者

まず、分析対象者の一覧を表1に示す。分析対象著者の来日の目的は、次のように分類できる。

①外交目的

時期は幕末が多い。職業は、外交官や軍人、医師など。活動の中心は江戸であり、大阪に関する記述は少ない。

表1. 分析対象著者一覧

人名	国籍	来日時職業	来日年	江戸	大阪	京都	文献参考
オリファント	英	外交官	1858	—	○	×	3)
フォーチュン	英	園芸家	1860	○	×	×	4)
リングウ	仏	領事官	1861	○	×	×	5)
オールコック	英	外交代表公使	1862	—	○	×	6)
アンペール	瑞	遣日使節団長	1863	○	×	×	7)
サトウ	英	通訳・書記官	1867	—	○	×	8)
ウィリス	英	医師	1867	—	○	×	9)
スエンソン	丁	フランス軍士官	1867	×	○	×	10)
ブランド	独	外交官	1867	—	○	×	11)
ミッドフォード	英	外交官	1867	—	○	○	9)、26)
ブラック	英	新聞記者	1868	—	○	×	9)
ヒューブナー	奥	元外交官	1871	○	○	○	12)
ブスケ	仏	御雇い法律家	1872	—	○	○	13)
クラーク	米	教師	1874	—	○	○	14)
モース	米	動物学教授	1877	○	×	×	15)
バード	英	旅行家	1878	—	○	○	16)
クライトナー	奥	軍人	1878	—	○	○	17)
ノルデンシェルド	芬	地質・鉱物学者	1879	—	×	○	18)
クロウ	英	商人	1881	—	○	○	19)
コトー	仏	旅行作家	1881	—	○	○	20)
クラフト	仏	無職	1882	—	○	○	21)
シドモア	米	人文地理学者	1884	—	○	○	22)
モール	独	御雇い宮中	1887	—	○	○	23)
キップリング	英	作家	1889	—	○	○	24)
コジェンスキー	奥	教師	1893	—	○	○	25)
ワットソン	英	不明	維新後	×	○	×	9)
ノリス	英	陸軍少佐	維新後	×	○	×	9)

○分析した ×記述がない —分析せず京都は外国人の

立ち入りが禁止されていたため記述がない。また、記述の中心は政治・外交的な話題のため都市風景に関する記述は多くない。

②御雇い外国人

時期は明治元年から10年までが中心である。御雇い外国人は、主に東京在住だったが、休暇で京都・大阪も訪れている。風景記述は比較的多い。

③世界漫遊家・旅行作家

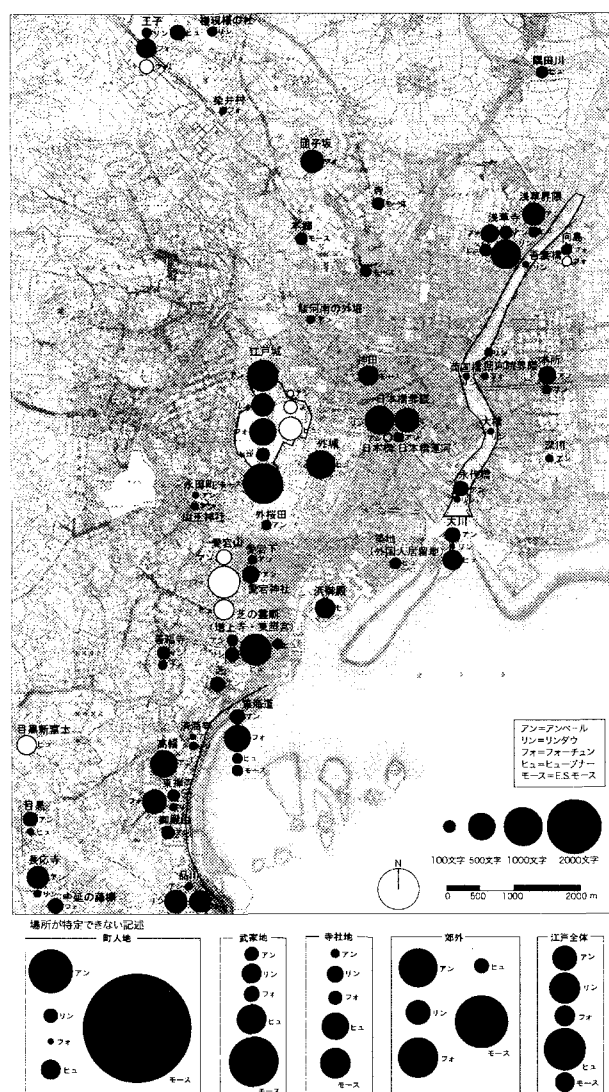
1880頃からの来日が多い。当時ヨーロッパのお金持ちの間では、世界一周旅行が流行していた。また、職業的旅行家もいた。ほとんどの著者が、行程の中で日本を一番楽しみにしており、訪問後の日本への評価も比較的高い。

6. 都市ごとの記述分析

(1) 江戸/東京

a) 記述の分布

江戸の記述分布マップ(図1)を見ると、江戸全体、



●：当該箇所に関する記述

○：当該箇所からの眺望に関する記述

図1. 江戸記述分布マップ

町人地、武家地、郊外といった場所を特定できない大きなスケールの記述が多いと言える。場所が特定できるものは、城や寺社などランドマーク的なものが最も多く、次に日本橋、浅草、東海道沿いなど他の地区と異なる特徴を持った界線的なものが多くなっている。

つまり、風景認識のスケールが全般的に大きく、所々で城、日本橋など他と際立った特徴を持つ建築や地区が認識されているという傾向が有ることが分かった。

このことは、「街並を人力車で行くと、屋敷町を通ることが多いが、街路から見ると、屋敷また屋敷の、単調な長い家並みが続く。」（モース¹⁵⁾）とあるように、町人地、武家地といった一つのゾーニング内においてはほぼ等質な風景が続いていたことと関係していると考えられる。

個性や独自性というものは、他との比較があって、はじめて生じる。同じ性質のものの集まりの中では、個性や独自性は現われない。そのため、風景がゾーニングという大きなスケールで認識されたと考えられる。そして、城など周囲と際立った特徴をもつものが「図」のように認識されていた。

ここで、同じ風景の個性・独自性をもった範囲のスケールを、ここでは『風景単位』と呼ぶこととする。すると、江戸の風景の特徴として、『風景単位』は商人町、職人町、大名屋敷町、旗本屋敷町などのゾーニングと一致していたということがいえる。

当時のヨーロッパの大都市では、江戸のような厳格なゾーニングは行われていなかった。ヨーロッパの都市では、大聖堂や宮殿など、都市のランドマークとなる大建築物が点在し、それらを結ぶように大通りが走っているという都市構造が一般的であった。このような都市構造のヨーロッパの都市においては、風景の個性・独自性が見られるのは、通り沿いの地区(写真1)や、広場一带や、ランドマークとその界限など、近景から中景で眺められるスケールであった。つまり、ヨーロッパの都市の

『風景単位』は、地区や界限や街並みといったスケールであったといえる。

地区や界限や街並みといった『風景単位』を持つヨーロッパの都市と比較すると、江戸の『風景単位』は比較的大きなスケールであった。江戸の『風景単位』が大きいということは、江戸の風景の個性が顕著に見られるのは、江戸の居住地全体を広く鳥瞰したときといえる(写真2)。江戸の居住地を広く鳥瞰すると、商人町や職人町や屋敷町など、それぞれの景観の個性が発揮され、単調さの中にも変化のある光景が広がったといえる。この

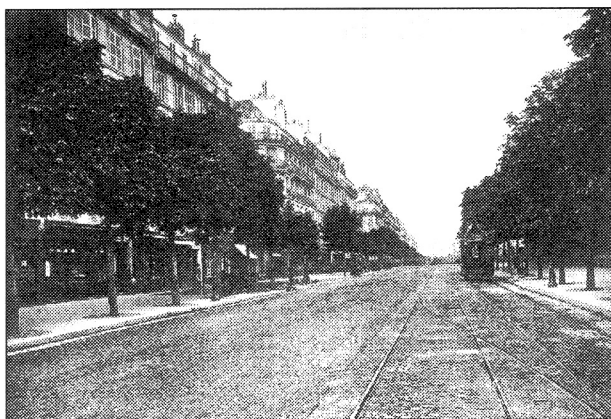


写真1. パリの街並み²⁴⁾



写真3. 日本橋本町通り²⁵⁾

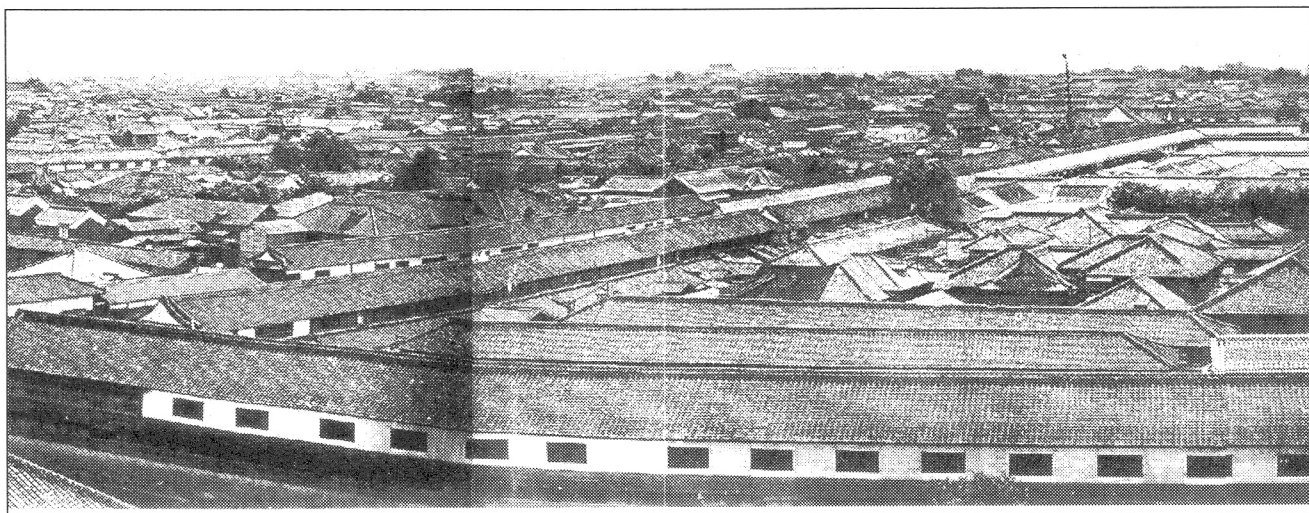


写真2. 屋敷町の鳥瞰像(愛宕山の頂上より)²⁶⁾

ような江戸の鳥瞰を眺めて、外国人は「奇妙」で「独特」な景観であると感じたのであろう。

また、日本橋本町通りなど、江戸の商業の中心地(写真3)では、通り沿いに商人の富の象徴である土蔵造りの店が建ち並び、他の町人町とは一風変わった街並みをしていった。つまり、この地区では、ヨーロッパの都市と同じく『風景単位』が街並みであったといえる。この商業地区の、江戸の居住地に一般的に見られるのとは異なる『風景単位』が、賑わいや土蔵造りの建築とともに、外国人に「江戸で唯一ヨーロッパの都会に似ている」という印象を与えた要因の一つであろう。

b) 記述の分析

i) 眺望景観

眺望景観を大別すると、建築物など人工物がつくる「居住景観」と地形や植物など自然がつくる「自然景観」に分けられる。

外国人から見た江戸の「居住景観」の特徴は、「長い道路と、白壁と、灰色の大海といった方が当たっているであろう。」(アンペール⁷⁾)とあるように、「等質」、「単調」、「陰気」といったものであった。

一方、外国人から見た江戸の「自然景観」の特徴は、「多様」で「鮮明」な色彩をもち、心を惹きつける「美しい」もので、居住区域に「生氣」を添えているものであった。

「この都会の置かれている地勢は大変恵まれている。

ヨーロッパの大都会よりも遥かに広がり大きいこの首都は、美しい空を抱き、柔らかな起伏の見られる大地の上に築かれ、緩やかな曲線の素晴らしい湾の畔に位置している。数多くの公園や庭園がこの江戸を埋め尽くしているので、遠くから見ると、無限に広がる一つの公園の感を与えてくれる。」(リンドウ⁵⁾)

このように江戸の自然は、起伏に富んだ地形と豊富な植物からなり、起伏に富んだ地形が江戸の至る所に素晴らしい眺望をもつ視点を生み出し、その地形と多種多様な豊富な植物群が多様な鮮明な景観を構成し、外国人の心を惹きつける美しいものとなっていた。これは居住景観がゲシュタルト心理学でいう「地」となり、自然景観が「図」となっているといえる。

ii) 町人地

次に街路から見た景観についてみる。

「看板には多くの種類があり、(中略)かかる種類の大きくて目につきやすい品物が、店の前面につき出ている町並が、どんなに奇妙に見えるかは、想像に難からぬ所であろう。これ等の店には一階建以上のものはめったに無く、ペンキを塗らぬか、塗っても黒色なので薄ぎたなく見え、看板とても極めて僅かを除いては白と黒とである。

このような、鼠色の街頭を、例えば、日本の美しい漆器のように黒くて艶のある頭髮に、目も覚める程鮮やかな色のオビをしめ、顔には真白に白粉をつけ、光り輝く紅唇をした娘が、この上もなく白い足袋に、こ

の上もなく清潔な草履をはいて歩くとしたら、それが如何に顕著な目標であるかは了解できるであろう。陰気な、古めかしい看板のある町の真中に、かかる色彩の加筆は、この他顕明であり、時として藍と白の磁器や、黄色い果実やをぎっしりと展観したものが、町通りに必ず魅惑的な外見を与える。」(モース¹⁵⁾)

このように、街路景観では、眺望の時の自然に代わり、人々の活動や衣装、商品が「図」となり、一般建築物が「地」となっていると言える。

以上から、中遠景においては、自然景観が「図」となり、居住景観が「地」になっており、近景では人の活動や商品が「図」となり、建築物が「地」となるという風景構造が分かった。

iii) 武家地

武家地の街並みの印象は、「長い道路と、白壁と、灰色の大海といった方が当たっているであろう。・・・この風景の単調さを破るものは何もない。」(アンペール⁷⁾)「街路から見ると、屋敷また屋敷の、単調な長い家並みが続く。」(モース¹⁵⁾)とあるように、「単調」といったものである。これは、屋敷建築に対する「建築様式がどれも同じ」、「簡素」な造り、「秩序」が支配しているといった印象とも結びついている。そして、このように町全体が屋敷で埋め尽くされた武家地を俯瞰して「またとない独特の絵図が繰り広げられている。美しいというのではない。美しさというなら何も驚くようなものはないのだ。そうではなく、その眺めの奇妙さ、規模において独特なのだ。」(ヒューブナー¹²⁾)と云っているように、同じ性質の景観が町全体に広がっているという屋敷町の風景のスケールの巨大さが外国人にとっては奇妙で独特なものに映ったといえる。

iv) 寺社地

寺社建築に対する外国人の印象は、「杉の木立に囲まれて質素な寺がある。」(アンペール⁷⁾)「その色調も淡い赤や灰色、淡くくすんだ緑色で、まわりを囲む老ヒマラヤ杉や銀杏の木の激しい色合いと見事に調和している。」(ヒューブナー¹²⁾)「幅が広く堂々とした構えの寺院のたたずまいにはどこか荘厳なところがある。・・・その周囲にある貧弱な、いまにも壊れそうな家屋との対照から、いっそう崇高かつ霊的なものとなるのである。」(モース¹⁵⁾)とあるように、「質素」な造り、樹木と「調和」した色、「荘厳」なたたずまいといったものであった。

以上のような印象を与えた寺社建築を含め、寺社地一帯に対しては、次のような印象を持っている。「至る所に森林を保護し、日本の自然美を立派な寺院によって、いっそう美しさを増している。」(アンペール⁷⁾)「それらを取り巻く環境は、いつもきまって一幅の絵のように美しい。・・・人のこころを魅するばかりのいちばん美しい場所が、つねに、かれらの崇める寺院の建立場所に選ばれている」(モース⁷⁾)とあるように、「自然美」

をたたえ、目を惹き付ける「神秘的」な魅力をもつ場所といった印象を持っている。

v) 郊外

郊外は、「田舎を大観すれば、一言でいうと、一つの公園であり、・・・南部の郊外と、西の地区と、市の中心に通じた街道のもっともはずれの境界まで立ち並んだ職人の居住地域と、稲田のつきるまで散在する村落と、最後に隅田川の兩岸の人々の住居の群れとかが、緑と花とで綴り合わされたものである。」(アンペール⁷¹)とあるように、大通り沿いに並ぶ茶屋や民家以外の場所では、田園や樹木の広がる自然の豊かな地域であり、「単調さのなかでもいちばん心を惹きつけ、心に沁み入る詩的なものだ。」(ヒューブナー¹²⁾)とあるように、外国人達はその自然風景のすばらしさに魅了されていたといえる。そして、その自然の豊かさを活かした名所・行楽地が郊外の各地に存在し、町人達の休息・遊楽の場として親しまれていた。

c) 江戸のまとめ

①武家地や町人地といった同一のゾーニング内では、ほぼ等質な風景が続くために、風景の認識単位のスケールが大きい。その中に、他と異なる特徴を持った建築、界限が点的に認識されている。

②中遠景においては、自然景観が「図」、居住景観が「地」という構造が見られた。

③近景においては、人々の活動、衣装、店舗の商品が「図」建築物が「地」という構造が見られた。

(2) 大坂/大阪

a) 記述の傾向と分布

大坂の記述分布マップを図2に示す。町全体の印象や雰

囲気、町人地全体の特徴などの場所を特定していない記述が多い。これは、江戸同様、町並みが等質的であったためである。

場所を特定した記述では、大阪城、四天王寺、造幣局などランドマーク的な建築物の記述が多いのが分かる。また、淀川の記述も多い。これは、舟運の活況や屋形船遊びなど様々な活動が淀川上で行われており、他の地区と大きく異なる特徴があったためと考えられる。

繁華街では、道頓堀のように芝居小屋の幟が立ち並び他の地域とは際立った特徴のある通りのみが、界限的領域として認識されていた。

このように、大坂においても江戸同様、町全体、町人地全体といった大きなスケールの認識があって、その中で他とは際立った建築や地区が所々で認識されているということが分かった。

このことは、町全体は「地」として認識され、ごく一部の特徴ある建築や水辺、界限などが「図」として認識されていたと解釈できる。

b) 記述の分析

i) 町全体の印象・雰囲気

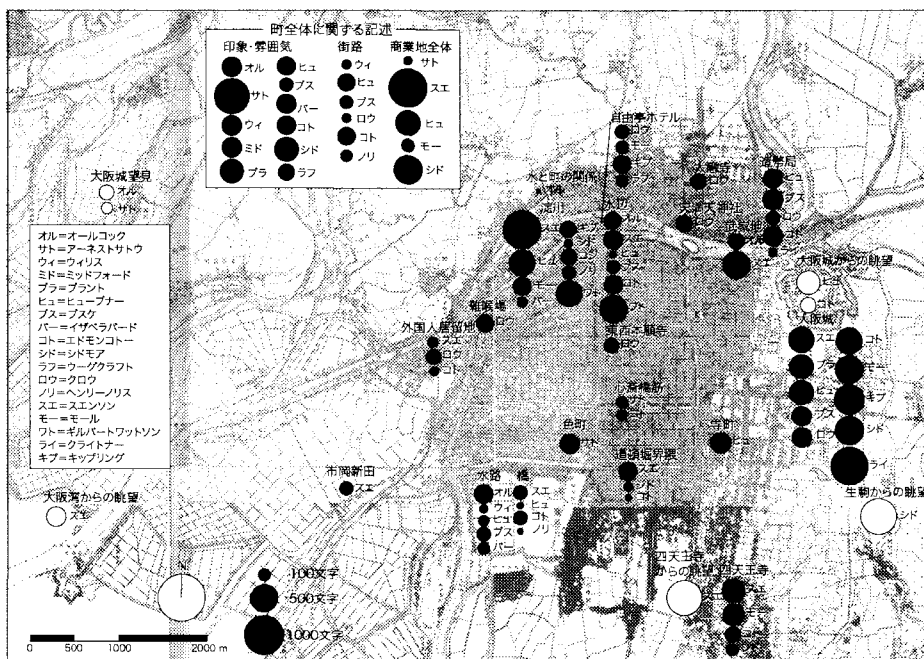
大阪の町の印象は大きく4つに分けられる。活気と魅力ある町、様々な娯楽、東洋のベニス、単調な町並みである。

活気あふれる人びとの活動と人口の多さ、活発な商業・交易活動の様子から、活気と魅力ある町と映ったようだ。大坂には、「街路や店、劇場、寺院には、江戸や横浜で見なれているものとは趣の全く異なった独特の魅力」があった。また、女性の服装も江戸よりも華やかだったとある。

娯楽については、茶屋、劇場、見世物小屋、寺院、屋形船、天神祭、遊廓、相撲などがあげられている。この娯楽の多様さは、人びと、特に商人の豊かさから来ていると考えられる。つまり、商売が繁盛し町が富み、それ故に多様な大衆娯楽が発展したのだと考えられる。

当時の大坂が東洋のベニスと呼ばれていたことはよく知られているが、その根拠としては、縦横に張り巡らされた水路と活況な水運、広い河の流れ、それに架かる多くの橋、美しい河岸風景、屋形船などの水上の娯楽があげられている。

これらの高評価とは対称的に、単調で面白くない町並みという印象も若干あげられている。理由としては、大きな公共建築物がな



● : 当該箇所に関する記述

○ : 当該箇所からの眺望に関する記述

図2. 大阪記述分布マップ

いこと、家並みが木造の二階建てで単調であること、色彩に乏しいこと、起伏のない平地であること、街路が直交していることがあげられている。

ii) 眺望景観

記述には、①町の高い場所（四天王寺と大阪城）から見た記述②町とは離れた地点（大阪港と生駒）から眺めた記述の二種類がある。

①で語られる大坂/大阪は、「莫大な面積の平地」にあり、外側のうち三方を「山並み」に、残り一方を大阪湾によって囲まれ、淀川が中心部の北を東から西へ走る。そして、周辺部には「未使用の広大な地域」「庭園や森に囲まれた大君の城」「大名の屋敷や兵舎」があり、田圃が広がっている。町中には「多数の運河」が「縦横無尽」に走り、「運河によって分けられた無数の小島」が、「大小様々な橋」によって結ばれている。そして、「家々がひしめき合」っており、「二つの寺院（東西本願寺）の屋根」だけが低い家並みから「浮かび上がって」いた。

この眺望景観に対して、スエンソン¹⁰⁾は、「感心することはまずない」と述べている。それは、「かなりの高さまで抜きん出ている建物がほとんどないため」である。さらに、大阪には町中に木々がないため、単調さを断ち切るものは、「街の周縁部に限って繁茂」していた木々や「そちこちの森」だけであった。

また、ヒューブナー¹²⁾は大阪城からの眺望を「すばらしい展望」と述べている。ヒューブナーは、夕日に染まる山々と町中に点々と落ちた雲の影を褒め称えている。

コトー²⁰⁾は、海上に浮かぶ淡路島を記述している。

これらの記述で共通しているのは、家並みが「地」となっており、それに対し森や木々、山並み、淡路島などの自然が「図」として認識されていることである。

②には、大阪港と生駒からの記述がある。大阪港からは、大阪の町は見えず、単色の水田が海岸線まで広がり、木すら見えず、「晴天のときにだけ大君の要塞の白い壁」と「寺の大きな塔」が見えるだけであった。生駒から大阪への道中でも同様に「エメラルド色の平野」が広がり、「遠く大阪城の砦壘と五重塔【四天王寺】の先端が島のようにそびえて」見えるだけであった。大阪へ向かうものにとって、その姿を確認するランドマークとしては大阪城と四天王寺の二つがあるだけであった。

このように、一般家屋の作り出す居住景観が「地」となり、自然景観や寺院建築や城が「図」となっている風景構造が江戸同様、確認できた。

iii) 水辺景観

淀川と町に縦横に張り巡らされた無数の水路と数え切れない橋は、商業・交易、交通、治水としての役割を果たすだけでなく、町の最も特徴的な景観要素でもあった。淀川と水路の景観について、以下で述べる。

まず、当時の淀川は「商品や客を乗せた何千もの舟」が行き来しており、非常に活況していた。ヒューブナー¹²⁾は、この賑わいは江戸/東京の隅田川を凌ぐと述べて

いる。

また、水面は「ジャンク船の二重三重の列が河床を狭め」「真ん中に細い隙間が一本残っているだけ」で大変混雑していた。しかし、このような混雑ぶりにもかかわらず、混乱している様子は全く見られない。むしろ「大きな船のあいだをすいすいすり抜けていく」とか「忙しい渡し船の間を縫って（中略）舟が滑っていく」などスムーズに航行していると言える。混雑の中にも一定の規律と秩序が行き届いていることは、淀川の賑わいの特徴と言える。これは、船頭同士に暗黙の了解的な規律や信頼関係があったからだと思われる。

次に、水上での活動について見ていく。「水上での活動が多様なので、ベニスより見るべきものが多い」、「ベニスよりずっと活気がある」「ベニスより水上生活者が多い」などから、多くの人びとが様々な活動をし、賑わっていたことが分かる。

具体的には、まず、商品や客を乗せたジャンク船や三板、小舟である。大坂/大阪は水運が発達していたため、オールコック⁶⁾らが言うように、町を巡るには馬よりも舟の方が便利だったようである。また、舞妓や芸子を乗せた屋形船、釣りをする舟、となりの舟と取引をする舟、食事の支度をする男たちをのせた舟が描かれている。

さらに、天神祭などの催しも水上で行われていた。「無数の提灯」が「美しく照り映え」「明かりをつけ花を飾った数百艘の小舟が浮かび」「まことに魅力的な眺めであった」とある。このように、淀川と運河は、水運だけでなく、取引などの生業の場、屋形船などの娯楽の場でもあり、「陸の生活よりも水の生活に縁が深い」とあるように、民衆の生活と非常に密接に結びついていた。

次に河岸に目を向けると、「武家屋敷沿いの木が植えられた美しい石垣」「蔵や米蔵」「通りに並んだ柳」「綺麗に設計された庭園」があり、護岸は「石造り」で「よく整備されていた」ことが伺える。水辺の樹木が「水面に美しい影を落とし」ていたとあり、川の水が澄んでいたこともよく分かる。

これらは「無数のロバの背のように曲がった橋」と一緒になって「イタリアの川の情景にも劣らない」「絵のように美しい運河の光景」を造りだしていた。

そして護岸には、至る所に水辺に面した石の階段があり、「簡単に舟との行き来」ができ「舟を直に家に着ける」こともできた。これらの護岸の設備などからも運河と生活が密接に結びついていたことが分かる。

また水上には、茶屋などの突き出した露台がある。これは西洋人にとっては珍しいもので多くの著者が注目している。この露台は河岸の風景に「一種の優美さと独創性」を与えるものであった。そして、ここでは「大勢の人々がバルコニーに出て外気を楽しみ、小さな集団をつくって和気藹々と酒や茶を味わ」っており「こういった雰囲気は見ていて楽しいもの」であった。

このように大坂の庶民は、茶屋の露台から水上の風景

を楽しむとともに、船上からも水辺の風景を楽しんでいたことが推察できる。つまり、淀川と運河は、大坂の町（街路や橋など）から眺められる特徴的な景観であったと同時に、大坂/大阪の町を眺める視点場でもあったのだと言える。

iv) 町人地

当時の大坂の商業地域は、サトウ⁸⁾によれば江戸のそれよりも広がったようだ。また、最も栄えていた地域は心斎橋筋であった。

特定の場所に関する記述は少ないのだが、最もよく登場する場所は劇場街道頓堀である。道頓堀は劇場の「正面がけばけばしい絵で飾られ」「おびただしい数の人間」が「出入り」しており、このような光景は質素で単調な日本の町並みにおいては一際目立つものであった。そのため多くの著者が道頓堀に触れているのだと考えられる。

街路から見た町並みは、眺望景観同様、単調なものであった。「低く」「ちっぽけ」で「べっちゃんこな屋根」の全く同じ家屋が続いて「変化に乏しい」。「黒と灰色の色調が圧倒」しており、「これほど優雅さを欠くものはないし、これほどさびしいものはない」。そして、このような町並みの「単調さを補っていた」のは、「売りに出されている品物」「歩行者の群れの豊かで多様なさまと奇抜さ」などの「活気」であった。

またスエンソン¹⁰⁾は、同じ職種の店舗は同じ通りに集中して立地していることを町の特徴としてあげている。そして、店舗が扱う商品、例えば磁器、石灯籠、材木などによって通りが特徴付けられている様子を描いている。

つまり、街路からの景観では、建築物（一般家屋）が「地」となり、人々の衣裳や活動、店頭に出された商品などが「図」となっていることが分かった。

v) 寺社地

比較的小さな寺院の集積する寺町には「神々の境界には静寂」があり、樹木が「通行人たちに日陰を作り」、他の地域とは異なる雰囲気があった。

しかし、これとは対称的に天満天神社や東西本願寺、太融寺、四天王寺などでは市場が開かれたりして多くの人が訪れ、名所となって賑わっている。これは、大坂/大阪の寺社地の大きな特徴であろう。クロウが指摘しているように、寺院はしばしば市場など俗的な目的で利用されることも多く、このことは西洋人の目に大変奇異に映ったようだ。

vi) 武家地

武家地に関する記述は少なく、舟から見た様子が若干あるだけだ。記述によると、立派な屋敷の塀が延々と続いており、ところどころに門が川に向かって立っていた。そして屋敷は富と権勢を伺わせる立派なもので、町人地に比べると落ち着いた雰囲気が感じられる。

c) 大坂/大阪のまとめ

大坂/大阪について、以下のようにまとめる。

①風景認識の単位が、町人地全体などのようにスケールが大きい。その中で他とは際立った建築や地区が所々で「図」のように認識されている。

②中遠景においては、一般家屋の作り出す居住景観が「地」となり、自然景観や寺院建築や城が「図」となっている。

③近景においては、建築物が「地」となり、人々の衣裳や活動、店頭に出された商品などが「図」となっている

④淀川の水の上では、屋形船遊びや、釣り、祭りなど、護岸には茶屋遊びなど様々な娯楽活動があり、都市風景の魅力となっていた。

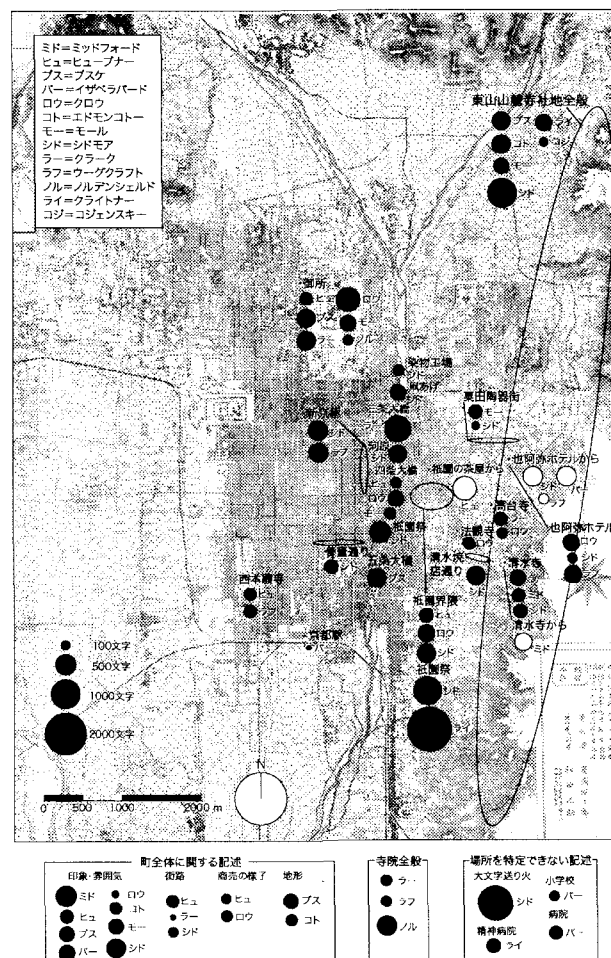
(3) 京都

a) 記述の分布

図3に京都の記述分布マップを示す。京都に関する記述では、東山山裾の寺社地に関するものが多い。ここでは、寺社そのものよりも、むしろ周辺の自然環境に着目しているものが多い。

町の記述では、やはり町全体の印象、雰囲気などが多く、認識のスケールが大きい傾向がある。

建築物で認識されているのは、御所、本願寺などがある。また繁華街では祇園、新京極、骨董通りなどの他の



●：当該箇所に関する記述

○：当該箇所からの眺望に関する記述

図3. 京都記述分布マップ

地区と際立った特徴を持つ地区がよく認識されている。水辺の記述は、鴨川周辺に関するもののみである。また京都では、祇園祭、大文字送り火などの祭りの。様子がよく書かれている。

以上を整理すると、やはり京都でも町全体に共通した町並みや印象が「地」として認識されていて、その中で周囲と際立った特徴的な建築、界限、水辺などが「図」のように認識されていたと言える。

b) 記述の分析

i) 町全般・印象

京都の第一印象は、「鄙びた佇まいにがっかりする」や「一見したところ少しも魅力的に思われない」といったものも多い。その原因は、京都が幕末期に西洋人の立ち入りが禁止されていた神秘的な都であったため、他の日本の都市とは違うのではないかと多に期待していたのに、「壮大なもの、偉容を誇るものは何一つなく」、御所も「大名屋敷にくらべると田舎屋のようなもの」であり、「立ち並ぶ家々は屋根が低く」、「他の町のものと似ていた」ためである。

また、明治初期の京都は遷都により「重要性和規模が減少」し、「天皇の後を追った商家の多くが閉店、廃屋」となっており、非常にさびれていた時期であったため、より一層町並みが単調に寂しく感じられたのである。

しかし、「この最初の印象は長くは続かない」。西洋人は、他の都市にはない魅力と威厳を京都から感じている。この京都の魅力、威厳は様々な要素からもたらされている。

まずは、モールは「古い日本の王朝の威厳についての観念を与えてくれた」と言う。また京都には、「日本で最も壮大な寺院」がある。この御所と数多くの寺院が京都に威厳を与えている主な都市施設と考えられる。

また、綿織物、装飾品、陶磁器などの洗練された工芸品も京都の大きな魅力であった。とくに当時のヨーロッパではジャポニズムが流行し、京都の工芸品は大変にもてはやされていた。

町を歩く女性も西洋人の目を惹きつけるものだった。バードやヒューブナーは京都の女性は他の町よりも美しいと言っている。髪型や着物や帯の色遣いなどに上品で控え目な美しさが表れていたようだ。

娯楽が凝っていることも京都の魅力としてあげられている。「美しい茶屋がたくさんあり」、「三味線の演奏会」など「至る所で音楽が聞こえ」てくる。

西洋人が感じ取った京都の良さは、奥ゆかしく洗練された上品な美しさであった。

こういった京都の魅力は、すぐに実感できるものではない。この点についてシドモアは「京都にいて最高に楽しい暇つぶしとは、同じ場所へ再三再四通うことです。同じ事を繰り返すことにより、急には望めなかった日本精神の面白い優れた深層へ到達します。」と書いている。これこそが、京都の魅力で今も京都が愛され続けている

理由の一つと思われる。

さらに、「京都は伝統を忠実に守っており、東京を没我状態に陥れている外国ファッションの受け入れは極めて緩慢」（シドモア）であったことも、バードやシドモアのような知日派の西洋人が京都を愛した大きな要因となっている。

ii) 眺望

視点場としては、東山山麓の寺院や也阿弥ホテル、祇園の茶屋があるが、記述はいずれも共通した点が多い。

まず、一般家屋の家並みが「低い人家のごちゃごちゃした同じような一つの塊」「人家の黒い屋根だけが見える」「黒く磨かれた石炭の塊」「平坦な屋根の続く平野」などのように表現されている。

この単調な「屋根の海原」の上に二条城の「切妻屋根」と「白い城壁」、御所の「広大な屋根」、「トランプの城のような」寺院の屋根が聳えていた。また、「暗いけれども鏡のように輝く平面」のような家並みを背景に「寺社の聖なる木立」や吉田山などの「小島」や丘陵の「緑のオアシス」が映えていた。

これは、大坂の眺望景観同様、一般家屋が作り出す景観が「地」となり、それに対して、城や寺院などの大きな建築物や自然が「図」となっていると言える。

また、夜景は「数え切れないランプや提灯が光り輝き、狭い道は松明行進のごとく火の行列で波打ち、さらに鴨川は一本の帯になる」（シドモア）とあり、鴨川の河床の宴会や河原に並ぶ提灯が「図」となっていた。

京都盆地を取り囲む山々も非常に印象的に記述されている。「尾根には光が満ちあふれていた」「京都の山々は名前の付けようもないさまざまな色から色へと変化する」「山壁はバラ色やライラック色のペールをまとい」「甘美な青いペール」などのように太陽の光とそれに照らされた山並みの美しさを褒め称えている。これは日本の湿気の多い大気と山に囲まれた京都特有の地形による非常に魅惑的な景観であった。

以上のように、京都でも居住景観が「地」となり、自然景観と寺院、城が「図」となっている風景構造が確認できた。

iii) 水辺

京都の水辺景観に関する記述は全て鴨川で、その他の水路などに関する記述は見られない。鴨川の記述は夏の夕方から夜の河床での宴会や河原をそぞろ歩く人々の記述が多いので、まずはその様子から詳しく見ていきたい。

ヒューブナーは鴨川の夏の夜の賑わいを「ヴェネチアの祭りのようだ」と言っている。多くの著者が鴨川の賑わいについて同様な記述をしていることから、鴨川の夏の夜は毎日が祭りのような活況だったことが推測できる。

まず鴨川で特徴的な設備は、河床である。河床には二種類あり、一つは現在の鴨川にも見られるような高床式の河床であり、もう一つは足を水に浸すことができる程の低い床である。

河床では、いくつもの宴会が提灯の光の下で催され大変な騒ぎで、クラークは「日本に来て以来の一番騒々しい人々だった」と記述している。河床は鴨川の風景を楽しみながら食事也能する「蒸し暑い日にも新鮮な微風がいつもある」「全く独創性のある消夏法」であった。

次に河原でまず目に行くのは、浅瀬に沿って並んだ数千の提灯である。この提灯は、宴会の卓、見世物小屋、露天商などの灯りである。この提灯の光景は橋から見た時に「一際華やかな趣」であり、「数えきれぬほどの黄、白、青、の提灯が川面に映って輝いていた」。このような記述は、三条大橋、四条大橋、五条大橋の上からある。いずれも提灯の作り出す光景の美しさが賛美されている。このことから、三条から五条までの長い区間（約 1.6km）に渡って賑わいが続いていたことが分かる。

河原には宴会ばかりでなく、見世物小屋もあったようだ。特に祇園祭りの時には「たくさんの行商人、露天商、芸人が魅力あるテント小屋を建て」ており、「河原には数え切れない程の果物屋が並び」、「小間物屋、帽子、玩具、草花の店」もあった。見世物小屋には、「操り人形、奇術、からくり眼鏡」などが「私たちを誘惑した」（シドモア）とあり、非常に楽しげである。

さらに水上では、くるくると回る提灯、遊覧船が出ていたり、三条大橋近くの中州では馬の見世物や競争が行われていたりしていた。

最後に女性が賑わいに彩りを与えていることも見逃せない。特に祭りの日には、皆が晴着をきて、「この場の雰囲気」にふさわしい艶やかな夢舞台を演出」していた。

この賑わいは真夜中まで続いていた。このように夏の夜の鴨川は大変な賑わいであった。

冬になると、「夏の明るさに変わって荒涼とした無彩色の吹きさらしとなる」のだが、正月になると恰好の風揚げ広場となり「勇壮無比の空中カーニバル」が観覧できた。

このように、鴨川は住民にとって欠かすことのできない生活や娯楽の場であり、プスケが言うように京都住民は鴨川を「熱愛」し、また「誇り」に思っていたのである。

iv) 町人地

町人地全般

京都の町人地の様子については、かなり記述が少ない。西洋人は骨董品や工芸品、陶器を買いに出かけて町人地を歩いているのだが、町の景観よりも陶器などの品物に関して詳しく書いている。

京都の町屋に関する記述は全く見られず、強いて言えばクロウが「店も住宅も、大阪や神戸のそれよりずっと勝っているように見える」と述べている程度だ。西洋人の目には、京都の町屋も、他の日本の都市と同様な木造二階建ての家屋が続く町並みとしか映らなかったようだ。

祇園

特定の場所の中では、祇園界限に関する記述が多い。

祇園は「金持ちの若旦那たちが好んで入り浸る茶屋がほとんど途切れることなく続き」、「射撃場」や「猿芝居」などの「掛小屋」が並び、「劇場（南座）」「演舞場（祇園甲部歌舞練場）」では催し物が行われており街路には「旗印、絵画、太鼓が目立ち」、「市とお祭りが常時行われて」いるような賑わいだった。

とりわけ、祇園祭の時は「通りは人の群れでごった返し」「目の眩むような祭りの賑わい」であった。そして、「大きな叫びやしゃべり声が耳をつんざき」、「口喧嘩や小競り合い」が「ところどころで始まり」、ついには「数人が逮捕」されるなどかなりの騒ぎである。こういった混乱した様子の記述は、日本では他にみられない。

しかし、山鉾が来る頃には「模範的な秩序が回復し」、「大半の見物人は冷静かつ控え目であり、祭りの行列もこの上なく整然と行われた」のである。このように祭りなどの大変な混雑時においても、若干の混乱は見られるものの、基本的には秩序と規律が行き届いていることは日本の繁華街の大きな特徴である。

祭りの日の通りには、屋台や露天商が並び商売を営んでいた。

祇園祭りの記述で最も多いのは、提灯に関するものである。通りには「五歩間隔で」杭が打たれ紙提灯がぶら下げられ、八坂神社周辺では屋根、柱、壁などところ構わず紙提灯がぶら下げられた。また道行く人もみな提灯を手に携えていた。そのため「祇園の入口から四条大橋までの通りは、人の波とぎらぎらする光に満ち」ていた。

また、「巨大な竹竿の先」につけた松明と「たくさんの松明と提灯、絹や紗の衣裳の僧侶の行列の行進」という見世物もあった。祇園祭というと山鉾巡行があまりに有名だが、西洋人は山鉾巡行よりも、街路等に配置された固定された提灯と人々の持つ揺れ動く提灯や松明によって作り出された光景により興味を惹かれたようだ。

このように、提灯の光景が魅力的に映ったのは、町の暗さがあったからだ。現在のように町が明るいとその提灯など必要ないし、仮に使っても提灯の灯りなどは全く目立たないだろう。つまり、鴨川や祇園の夜の景観では、町の暗さが「地」となり、提灯の明かりが「図」となっていたと言える。

新京極

新京極は、「狭い通り」で「道全体に商店街、迷路のような市場、露天商、さらに屋台、劇場、見世物、覗きからくり、操り人形、蠟細工、手品師、軽業師、力士、調教された動物の芸、講談師、占い師が並び」「朝も昼も夜も真夜中も徘徊する人や遊び回る子供であふれ」ていた。また、呼び込みやジンタ（吹奏楽隊）の音もうるさかったようだ。

特に見世物小屋の前は「夜は河原と張り合う呼び物で京都一にぎやかな場所」であり「太鼓や銅鑼が鳴り」、「松明」が燃え、「興行師」がプログラムの内容を歌い上げ、「行商、巡礼、僧侶、老若男女、外人が群れをな

し」ていた。そして、「小屋の壁は見世物の感動的なシーンの絵が、宣伝のためにけばけばしい色で塗りたくられていた」。

また夏には、「中国風に広い日除けごさを屋根の間の狭い路に渡して」日射しを防いでいた。

新京極は、明治五年から十年にかけて整備された当時では新しい通りである。にもかかわらず、銀座レンガ街のような西洋的繁華街ではなく、全く日本的な繁華街であったと芝居小屋などから判断できる。

また、通りでは様々な見世物が行われ、銅鑼や太鼓が鳴り、興行師の声が響くなどの雑多さ、喧騒さがあり、屋台や露天が並び、屋根にはゴザを渡すなど設備は仮設的である。

このように通りの雰囲気は日本的というかむしろアジア的で、とても新しく整備した街路とは思えない。しかし一方で、「人力車の通行を禁止」し、歩行者の利便を優先させるといった思い切った施策も行っている。

事業としては鴨川と匹敵するほどの賑わいを見せていたというのだから、当然成功と言えよう。新京極は現在も賑わう繁華街であり、大変興味深い街路整備事業ではないだろうか。

陶磁器店通り

当時はジャポニズムの流行から京都の陶磁器は、西洋人から非常に高い人気があったが、陶磁器店街の町並みに関する記述はシドモアとモールだけだ。

モールは陶器の町に赴き、その町並みを「どの街路、どの家を訪れても、陶器、陶器の連続」と表現しており、陶磁器店が集積して立地していたことが分かる。これは、タイザンの工房という記述から栗田地区（東山三条から蹴上）と推測できる。

また、シドモアは五条大橋から清水寺仁王門への道の「片側半マイルに瀬戸物屋が並び」また、「延々と並ぶ露天商の魅力的品々」があり、巡礼者、観光客で賑わっていたと書いている。このように、陶磁器店は集積して立地し、店先に並んだ品々によって通りが特徴付けられていた。

さらに、道から店内で作業をしている様子が見えることに、二人は注目している。「店」はもともと「見せる」が転じたもので、それは品物を見せるだけでなく、作る工程も見せた。それで客は気軽に声をかけ、安心して買うことができた。それが日本の店の開け放した造りに繋がっていたようである。

以上をまとめると、町人地においては、一般建築物が「地」となり、人々の活動、衣裳、提灯や店舗の商品が「図」となっていることが言える。

v) 武家地

京都では武家地に関する記述は、見られなかった。

vi) 寺社地

京都を訪れた西洋人は、現在の観光客と同様、非常に熱心に寺社を訪れている。寺社に関する記述で共通して

いることは、まず京都の寺院の規模と数が日本一であるということ、次にその寺院の多くが東山山麓に集中していることである。

そこで寺社地については、東山山麓の寺社地に焦点を絞って見ていく。

まず、寺院が眺望ポイントになっていたことがあげられる。清水寺、黒谷、吉田山、法観寺、東福寺からは市街を眺望することができた。

次に東山山麓の自然の美しさがあげられる。東山山麓の風景は「絵のように美しい緑為す丘陵」「神々しい土地」「紫色に煙る丘」など、大変高い称讃を受けていた。この美しい自然と「素晴らしい雅趣」「簡素さ」「歴史」を備えた寺院建築とが一体となって、東山の寺社地は神聖な雰囲気空間となっていた。具体的に言うと、寺院へ至る参道や遊歩道は「並木、竹林、常緑樹の森」に囲まれており、塔も「アーチ状の緑樹の額縁の中に絵画のように収まって」いたし、寺院の敷地内には美しい庭園があり「ぶらぶらと逍遥を楽しむ」ことができた。

さらに東山山麓には「東京や大阪の寺（浅草寺や四天王寺などの名所化している寺院のことを言っている）の騒々しさとは全く違った夢のような静けさ」があり、この静寂さが「これらの寺が詩的なものに映ることを少なからず助けて」いた。

このように、東山山麓の寺社地は、山麓という立地条件を活かすことで神聖な空間をつくりだしていた。

しかし、京都でも清水寺や八坂神社のような名所化している寺社では、茶屋や見世物小屋などの娯楽場が隣接し、「銅鑼」や「三味線」の音などが鳴り大変な賑わいで、「祈願と歓楽が一体」となっていた。

c) 京都のまとめ

①風景認識のスケールが町全体などのように大きい。その中で他とは際立った建築や地区が所々で「図」のように認識されている。

②中遠景においては、一般家屋の作り出す居住景観が「地」となり、自然景観や寺院建築や城が「図」となっている。

③近景においては、建築物が「地」となり、人々の衣裳や活動、店頭に出された商品などが「図」となっている

④鴨川では、河床での宴会、夕涼み、見世物見物、風揚げなど多様な娯楽活動が見られ、都市風景の魅力となっていた。

7. 日本の都市風景の特徴

(1) 風景の認識単位

三都市いずれにおいても、風景認識のスケールが、町全体、武家地全体などのように、大きい傾向があることが分かった。これは、町全体に共通した町並みや印象があったこと、特にゾーニング内においては、ほぼ等質な町並みが続いており、また町全体の町並みに統一感があったという近代化以前の日本都市風景の特徴が原因とな

っている。

そして、この大きな認識領域が「地」としての役割を果たし、周辺と際立った特徴を持つ建築、水辺、界限などが「図」のように認識されていた。

(2) 景観における「地」と「図」

中遠景においては、自然景観が「図」、居住景観が「地」という構造が三都市に共通して見られた。また、近景においては、人々の活動、衣装、店舗の商品が「図」建築物が「地」という構造がやはり共通して見られた。

(3) 都市における娯楽活動

江戸/東京では、隅田川や郊外の名所などで散策や茶屋、花見などの娯楽活動が見られた。大坂/大阪では、淀川において屋形船遊び、祭り、釣りなど様々な娯楽活動があった。そして京都でも、鴨川で河床の宴会、河川敷での散策、見世物など多くの娯楽活動が見られた。そして、いずれの都市でも、こういった娯楽活動が好意的に記述されており、都市風景の重要な魅力であることが分かった。

8. 結論

(1) 結論

本研究では、幕末・明治期に来日した外国人の著作の風景記述を分析することで以下のことを明らかにした。

- ①風景認識単位のスケールが大きい。
- ②遠中景においては、建築物が「地」となり自然が「図」となるという風景構造が江戸/東京、大坂/大阪、京都の三都市に共通して見られた。
- ③近景においては、建築物が「地」となり、商店の商品や人々の活動・衣装が「図」となる風景構造が、やはり三都市共通して見られた。
- ④当時の日本では様々な娯楽活動が都市において見られ、都市風景の魅力となっていた。特に水辺が様々な大衆娯楽の場として利用されており、このような娯楽の場としての水辺利用は、際立った特質であることが分かった。

(2) 今後の課題

時代を通じて共通した日本都市の特質を知るため、大正、昭和或いは、江戸初期、安土桃山など時代を広げていくと共に、日本都市の特質をより明確に知るために、他のアジア都市についても調査を広げていく。

【参考文献一覧】

- 1) 北川大次郎、江戸・東京の都市景観形成原理に関する考察、土木計画学研究・講演集 No15 (1)、1992. 11
- 2) 青木陽二、1900 年までに日本に来訪した西洋人の風景評価に関する記述、国立環境研究所、2004
- 3) ローレンス・オリファント『エルギン卿遣日使節録』、岡田章雄訳、雄松堂書店、1968
- 4) オールコック『大君の都』（上・中・下）、山口光朔訳、岩波書店、1977
- 5) アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』（上・

下）、坂田精一訳、岩波書店、昭和 35

6) ヒュー・コータツツィ編『維新の港の英人たち』、中須賀哲朗訳、中央公論社、1988

7) E・スエンソン『江戸幕末滞在記』、長島要一訳、新人物往来社、1989

8) プラント『ドイツ公使の見た明治維新』、原潔・永岡敦訳、新人物往来社、1987

9) アレクサンダー・F・V・ヒューブナー『オーストリア外交官の明治維新』、市川慎一・松本雅弘訳、新人物往来社、昭和 63

10) プスケ『日本見聞記 フランス人の見た明治初年の日本』（全2巻）、野田良之・久野桂一郎訳、みすず書房、1977

11) E・W・クラーク『日本滞在記』、飯田宏訳、講談社、1967

12) イザベラ・バード『日本奥地紀行』、高梨健吉訳、平凡社、1973

13) クロウ『日本内陸紀行』、岡田章雄・武田万里子訳、雄松堂出版、1984

14) エドモン・コトー、『ボンジュールジャポン』、幸田礼雅訳、新評社、1992

15) O・V・モール『ドイツ貴族の明治宮廷記』、金森誠也訳、新人物往来社、昭和 63

16) キップリング『キップリングの日本発見』、加納孝代、中央公論新社、2002

17) E. シドモア『シドモア日本紀行』、外崎克久訳、講談社、2002

18) ウーグ・クラフト『ボンジュールジャポン フランス青年が活写した 1882 年』、朝日新聞社、1998

19) A・E・ノルデンシェルド『ヴェガ号航海誌』、小川たかし訳、フジ出版社、1988

20) G. クライトナー『東洋紀行』（全3巻）、大林太良監修、小谷裕幸・森田明訳、平凡社、1992

21) ヨゼフ・コジェンスキー『ジャポンスコー——ポヘミア人旅行家が見た 1893 年の日本』、鈴木文彦訳、朝日新聞社、2001

22) A・B・ミッドフォード『ある英国外交官の明治維新——ミッドフォードの回想』、長岡祥三訳、新人物往来社、1985

23) ルドルフ・リンダウ『スイス領事の見た幕末日本』、森本英夫訳、新人物往来社、1986

24) マール社編集部『100 年前のロンドン』Atalante『MARVILLE — PARIS』マール社 1996。Editions Hazan 1994

25) 小沢健志 鈴木理生『古写真で見る江戸から東京へ』世界文化社 2001

26) 芳賀徹 岡部昌幸『写真で見る江戸東京』新潮社 1993